

質的心理学の来し方と行方 — 日本質的心理学会設立集会「対談」

大橋英寿 放送大学 Hideshi Ohashi The University of the Air
やまだようこ 京都大学 Yoko Yamada Kyoto University

要約

質的心理学を開拓してきた、世代、専門、性を異にする二人の研究者が、自分自身の長年の研究の「来し方」をふまえて、今後の質的心理学の「行方」、研究の方向性や問題点について対談した。おもな対談内容は、以下のようであった。1) 複雑多岐の要因が連関するフィールドワークと質的研究との深い関係性。2) 質的心理学の理論的・方法的位置づけを明確にし、発表の場をつくっていく必要性。3) 研究者だけではなく相手にとっても重要なテーマを研究することと相手の琴線にふれるインタビューを行うための事例の積重ね。4) イーミックな視点の重要性と、他の視点との交差の必要性。5) 対象者の主体性と事例の匿名性への疑問。6) 旅日記的な事例記述に終わらず、一般化できる研究へ向かう方略。

キーワード

質的研究, フィールドワーク, イーミックとエティック, 事例研究, 一般化

Title

Past and Future Perspectives of Qualitative Psychology: Dialogue.

Abstract

Two pioneers of the qualitative psychology, social and developmental psychologists, from different generations and genders, discussed the history of their research and future perspectives in qualitative psychology. The main topics were the close relationship between fieldwork and qualitative research; the need to create a journal for publishing both qualitative studies and theoretical and methodological discussion of qualitative studies; the importance of the research theme, not only for researchers but also for participants; the need for psychological studies from an emic perspective; questions about the anonymous treatment of participants; and strategies for generalization from case studies.

Key words

qualitative study, field work, emic and etic, case study, generalization

フィールドワークと質的研究の関係

やまだ これから「質的心理学の来し方と行方」というテーマで、トークさせていただきたいと思います。まったく打ち合わせをしておきませんので、この場で共同生成として、対話的に何かが生まれてくれればいいのですけれども……。

大橋先生は、この分野のパイオニアとして、新しいフロンティアを切り拓いてこられました。質的心理学あるいはフィールドワークの「来し方」について、どのようなご研究をされて来られたのか自己紹介を含めてお話いただければと思います。

大橋 質的心理学会の設立集会にお招きいただきましてありがとうございます。私は、2年前に東北大学を定年退職し、今は放送大学へ出稼ぎにきております。設立集会への出席には躊躇したのですが、まあ枯れ木も山の賑わいかということで伺った次第です。私の研究が、量的でないことは確かなのですが、質的心理学なのかどうか、心もとないというのが実際のところですよ。

私の専門は社会心理学で、学生時代から約40年間、ひたすらフィールドワークをやってきました。とくに1975年から94年までの20年間は、沖縄のシャーマニズム現象をテーマに、沖縄へ通い続けました。

院生のころは、私の先生が犯罪心理学だったものですよから、少年院や刑務所に連れ歩かれ、収容者にインタビューする聞き取りを見よう見まねで身につけました。もう一つ院生の最後のころ関わったのは、青森県の下北半島の青年たちの進路選択とその後の追跡調査です。1960年代の高度成長期に、集団就職という形で都会に向かった若者たち900人の追跡です。この研究は40年たった今も岩手県立大学の細江君という後輩が続けてくれています。もちろん900人全員を追うことはできないのですが、今も追いつけていて、NHKの特集番組にもなり、貴重な研究になっています。いかにも東北らしい息の長い研究といえるかと思いますが……。

沖縄では20年間、シャーマニズムをやりましたが、そこからいろんなテーマが出てきて、最後の10

年近くは南米へ出向きました。日本からの移民、日系人、主としてボリビア、それからブラジル、そこに戦後、移住した農業移民、その追跡に7回ほど南米へ行きました。私のこのむさ苦しい髭はその名残です。なぜ髭を伸ばしたかという、治安が悪いものですか、少しでもラテンアメリカの男性風に髭でも伸ばせば多少治安に役に立つかということで。伸ばして行って、2月くらい向こうにいて、帰ってきて剃って……、だんだん面倒くさくなって剃るのをやめてしまって、その名残がこの髭でございまして。朝、楽なんです。髭を剃らなくてすむからです。そんなふうにして40年ほど出歩いてきたわけです。

フィールドワークというとカッコよく聞こえますが、無駄足が多いのです。フィールドワークは現場研究とか現地調査とも訳されていますが、「野良仕事」というのが一番適切な訳だと思っています。収穫するまで時間がかかるんですね、フィールドってというのは。楽しみもありますけど。私のやってきたことは、一言で言えばフィールドワーク、そこでの観察やインタビューということですよ。

やまだ ありがとうございます。先生が長年してこられたフィールドワークと質的研究は、とても関連が深いように思うのですが、先生のお考えでは、その関連性はどのようなものでしょうか。

大橋 質的研究は、非常に幅広い概念だと私は思っています。私の所属している社会心理学会でも、ある時期、極端に数量化に傾いて、機関誌『社会心理学研究』では統計表がないと論文ではないという時代が続きました。

年2回機関誌を出すようになる前に、年1回の『年報 社会心理学』という時代があったのですが、これも20数年続いたと思います。私はむしろそっちの方がはるかに優れていたと実は思っています。というのは、そこには社会心理学プロパーだけでなく、政治学、文化人類学、経済学とか、いろいろな方が社会心理学会のメンバーでした。ところが機関誌を年2回のジャーナルに切り換えた後、パラダイムが固定して、それとともに周辺の領域の先生方がどんどん学会から去っていったんですね。そして等質的な、私から言えば硬直したパラダイムの論文しか掲載されなくなった。私は一時期、社会心理学会をよほどやめようかと思っ

たかなりの時期がありました。それほど画一的なものになっていった。

かなり前のことですが、印象に残っているのは、藤永保先生の、編集された有斐閣の『児童心理学』のしがきで、こんなふうに述べていたことです。実験心理学以外の領域を選ぶ人びとは、異端者か脱落者とみなされる傾向が強かったそうです。暗黙のランクづけがあって、実験でも社会心理学は一段下に位置づけられ、変わり者がとりつく領域にみられ、教育心理学その他に至っては、正当な研究に耐えられない脱落者のたずさわるとされ、児童心理学などは子ども好きの変り者が自分の個人的関心を満足させている領域で、それはもはや心理学ですらなかった、と。

たぶん、計量的な方法と質的な方法のコンフリクト、あるいは、社会とか発達研究は、アカデミックなものではないという理念がずっとあったのではないのでしょうか。ようやく、ようやく、この十数年に、その硬直したパラダイムから多少幅が広がったのではないかと、私は見ているのですが。

やまだ ほんとうに、ようやく、ようやくですね。私は、ネズミの学習実験が卒業論文で、はじめは知覚や学習の実験心理学のトレーニングを受けました。それでは人間のことはわからないのではないかと思って臨床現場へ入って、自閉症のプレイセラピーをしました。しかし、臨床現場では、どうしても今目の前に迫ったニーズにおわれて「なぜ？」という原理的な問いに迫りにくいのです。それで研究者になろうと大学院に入り直しました。

最初は、乳児の発達を実験的に研究しました。けれど、どうしてもそれでは子どもの豊かな現実には迫れない。乳児の実験的な研究がメインでそれで修士論文を書いたのですが、ウラではこつこつと子どもの日常生活の観察をしていました。でも、ウラのほうが、本物だ。観察のほうが、はるかに豊かで意味ある文脈がすぐえるし、新しい発見ができると思えるのですね。30代半ばころからは、逆転して、誰に何と言われようとも日常行動の観察のほうが大事だと居直るようになりました。もともと質と量、両方のアプローチで研究していたんですが、質のほうが本来的だと考えるようになったのです。

フィールドワークと質的研究は、本来的に密接な関

係にあると私は思うのです。フィールドは、いろいろの要因が相互連関し、生態的に生きた形でつながっていますよね。けれども実験や調査研究をする時には、最初に仮説を出して、それに合う現象を非常に狭く限定して見ていく。たとえば乳児の行動では、知覚の発達とか運動の発達とか、狭くそれだけに焦点をあてなければ数量化できません。

私は、質と量というのは両方大事だと思います。しかし、両者は世界の見方や現象の切り出し方としては、実は矛盾する作業だと思うのです。現象を質的に切り出すためのアプローチの仕方と、量的に切り出すためのアプローチの仕方は違っている。量を取り出すには、それに適した方法があるし、質にも適した方法がある。

フィールドワークでは数量化できる部分もありますが、さまざまな要因の相互連関を見るには、質のほうに適している。質的記述には、もちろん限界もあります。たとえば、リーチングの仕方を記述するのであれば、「乳児がおもちゃにおずおずと手を伸ばした」というような印象記述よりも、リーチングする前に潜時がどれだけあって、おもちゃを何秒見たかというような時間測定をしたほうが正確に記述できますし、比較も容易です。しかし、「乳児はおもちゃに手を伸ばしたがすぐに取らないで、振り向いて後ろにいる母の顔を見て、それからまたおもちゃを見た。再び手を伸ばして、おもちゃを取ってから、母に見せた。」というような質的記述では、リーチングの時間だけではなく、その場の全体状況や行動のシーケンスが記述できません。フィールドでは、人もモノもいろいろなものが相互連関しているところに意味があるので、質的研究が、非常に有効ではないかと思っています。

かつての質的研究の孤独な位置と、発表の場づくり

大橋 私、初めてやまだ先生のお名前を知ったのは、「モデル構成をめざす現場（フィールド）心理学の方法論」、これは18年前の1986年ですか？ 当時、やまだ先生が勤めていた愛知淑徳短大の紀要に載った論文ですね。その後、『^{フィールド}現場心理学の発想』という新曜社の本に再録されましたね。

一昨年でしたか、広島で日本心理学会があった時、たまたま酒蔵が並ぶ西条の街で一緒に飲んだ時に、貴重なことをお聞きしました。やまだ先生がこの論文を書かれ、ある心理学雑誌に投稿されたそうですね。ところが、1年以上もたってから返されたのですってね。そこには何のコメントもなかった。ただ送り返されてきた。投稿した論文が、理由もコメントもなく、ただ返ってきた。この話は、私、かなり酔ってましたが、よく覚えてます。非常に象徴的な出来事だと思っただんです。

やまだ 酒場でお話したことを公の場で言っているか、差し障りがあるのですが……。日本心理学会の時、何かおいしいものを食べたいなと思ってふらっと裏道の店に入りましたら、なんと、そこにはすでに大橋先生がおられて、びっくりしました。フィールドワーカーというのは、狭い路地など好きで、ちょっと臭いがするとか、入りたい感じの店とか似ているのですね。

その雑誌の話は一つの例にすぎませんね。たぶん、その当時はもう、フィールド心理学や質的方法などは全く理解されない門前払いで、誰にも本気で読んでもらえない。その雑誌がよくなかったというのではなくて、あらゆるところがそうでした。まだ若かったのです、ここならわかってもらえるのではないかと期待をもって投稿して、返事を今か今かと思いながら待っていたので、その当時は心底がっかりして、しばらく論文を書く意欲をなくしました。研究者としては30代のいちばん生産的な時代で、あふれるほど書きたいものが湧き出していた時代に発表の場がなかったわけで、そのころ何度心理学をやめようと思ったかわかりません。

でも、それから10年以上たってから、小さな短大の紀要に載せた目立たない論文がロコミで若い人たちに次々に読まれるようになりました。あまりにリクエストが多くなったので、ずっと後になって『^{フィールド}現場心理学の発想』に収録しました。もともと、当時でも『教育心理学研究』に事例研究を載せましたので、全くすべてに拒否されたわけではなかったのですが、研究をしても発表する場がほとんどなかったですね。希望の光が見えないなかで一人ぼっちで暗闇に向かってすすんでいくという感じでした。それで本にするほかないと思って、『ことばの前のことば』を書いたのです。

この本も今も版を重ねていますが、最初に評価してくれたのは、哲学者や文化人類学者や言語学者でした。

私たちが『質的心理学研究』をつくらうと志したのは、研究を発表していく場所と仲間がほしいという長年の痛切な願いがあったからですね。研究誌があれば、ただ単に発表の場ができるというだけでなく、それを通じて対話が広がり、研究を研鑽し、蓄積していくことができますので。

大橋 その先程のやまだ先生の論文は、フィールド心理学の方法論ですが、質的なアプローチの方法論を量的方法と対照させて根底からとらえなおして、学問的に位置づけた、すばらしい論文だと思います。20年ほど前、それがボツになったことそのことよりも、黙って戻ってきたこと、それがほんとに何とかな、その当時の心理学という学問全体の雰囲気ですね、それを端的に表した「事件」ではないかと、印象深く残っているんです。審査する方とか、受け止める方も、よほど困惑したんだろうと思います。

私自身、数量化を否定しているわけではないんですよ。私も沖縄研究の中で聞き取りの質問紙調査もしています。ただし数量化は、最後の仕事だと思うんです。フィールドにもいろいろあると思いますが、施設でも幼稚園でも学校でも何でも構わないのですが、そういうところで長く耐えて、観察して、そして自分で問題を見つけていく。そして、ああでもない、こうでもないといって一つのモデルをつくっていく。見方を、フレームをつくっていく。それが全体としてというか、多くの人にあてはまるかどうかとか、という問いになった時に初めて、サーベイで質問紙つくって聞いてみる。最初に、先に、質的な研究があるのだと私は思っているんですよ。つまりケーススタディが先にある。しつこいほどの、嫌っていうほどしつこい少数のケーススタディを徹底的にやった後、それがもう少し幅広く該当するかどうかという時に、数量化っていうか、サーベイをやるべきだと私は思っているんです、決して逆ではないんですよ。

それから、私自身は、あまりにも極端な数量化の流れの中で、孤独感というか、違和感を、ずっと感じておりました。そういう主流に対する、カウンターパートをどういうふうにな付けたらいいか考えました。現場、人が生活している現場に入っていくという点では

フィールド社会心理学でいいだらうと思っていました。しかし人々の生活に密着して、その背景になっている社会とか文化構造を深くとらえる点では、エスノグラフィック心理学、エスノすなわち民族誌的な社会心理学、エスノグラフィックなソーシャルサイコロジーだと、勝手に自分を位置づけるようになりました。

相手の琴線にふれるテーマとインタビュー

やまだ 大橋先生は、エスノグラフィック社会心理学を切り開いてこられたのですが、先生は、沖縄のオバアたちに大変な人気ですね。さきほどおっしゃったように、現場に入っていくには、ただ単に研究のためというより、そこで人と深く知り合っていくことが非常に重要だと思うんです。実際にインタビューをされて、インタビューにとって重要なこと、あるいは、面白かったケースなどがあれば、お聞きしたいのですけど。

大橋 沖縄のオバアは、精神世界の奥が深くて、したたかで、私好きなんです。社会心理学に限らないと思いますが、どうやったら心理学が面白くなるのか。やまだ先生の質問にあった、インタビューをどうするのかという点で言うそうですね、その研究テーマが、研究者にとって面白いだけでなく、大切なのはインタビューする相手というか、話す相手にとっても重要でないといけないんですね、そのテーマが。相手にとって、あくびが出るようなインタビュー研究は大抵、つまらないですよ。対象者が義理で答えるような研究ほど、つまらないものはない。だから私は、自慢じゃないが、大学生を対象にアンケートをとったことは一度もないですよ。何の興味も湧かないわけですよ。日頃、毎日一緒に暮らしている学生の何かがわかって何が面白いのかって。全然関心が向かない。

私が興味を持つのは、インタビューということだけに限って言えばですね。相手にとって、その本人にとって、その対象者にとって、何ほどこですかね、その問題が、その人のエゴに触れてなきやいけないと私は思っているんですよ。Ego-involvement (自我関与) というかな。「よくぞ聞いてくれた」と相手が身を乗り出

して答えてくれる場合もあります。逆に拒否される場合ももちろんあるんですよ、「そんなことには答えられません」とね。だけど、どっちでもいいんですよ。とにかく、その質問は相手の、なんか、どこかを触発したはずなんです。相手のどこかに触れた。こころの琴線っていうのかな。ネガティブであれ、ポジティブであれ、相手がこっちに対して感情を示すということは、その問題がいい問題だということです。相手の生活の中核にかかわっているからだとは思うんですよ。

たとえば、まだ院生の頃、下北半島から集団就職をした、15歳で故郷を離れて、尾張一宮や彦根の紡績工場へ就職した子どもたちを訪ねた時に、院生数人で出かけて行って、手分けしてインタビューしました。ふと見たら、その対象者が、涙ぐんだり、泣いているんですね。泣かせているのはHという研究仲間です。ひどいことをするもんだって、その時は思ったんですけども。そのインタビューはすばらしい。彼が話しかけたこと、聞いたことが、その少女たち、15、16歳の子どもにとって、ホロリとするというか、涙をふくような、そういう質問になっているんですよ。故郷を思い出したり、生活のいろんな面に触れているわけですね。

ですから、私は、インタビューしているときに、そのインタビューしている相手が泣いたら、そのインタビューは一人前だと、そう思っています。ドアをピシッと閉められても一人前かもしれないけども……とにかく相手の喜怒哀楽の感情をゆさぶるようなインタビューをしたいとは私は思うんですね。

やまだ いいお話をありがとうございました。インタビューアーというのは、ともすると単なる聞き手で、一方的に相手から何か情報を引き出すというように、まだまだ誤解されているような気がします。インタビューすることは、聞くほうも、それから語る方も両方が啓発されるというか、両方でつくっていくというか、共同生成的な相互行為だと改めて今聞いていて思いました。

相手にとっても、核心的なこと、大切なことを、研究テーマにする。それには、聞く方も相手のことを深く知っていないと、聞けないですよ。そして、そのインタビューすること自体が、相手にとってもとても

いい体験であるというようなインタビューができれば一番いいってことですよね？

私も、この『質的心理学研究』の2号で、川喜田二郎先生にインタビューをしたのですけれども、後で川喜田先生がとても喜んでくださった。「こういうふう質問してくれた人は今までない」といわれました。非常に著名な方ですし、KJ法について解説したり、質問されるという経験は数多くあったはずですが、「じゃ、このことについてはどうなんですか？ どうなんですか？」というふうに核心を突いて深く質問されたことは今まであまりなかったの、うれしかったです。

研究者にとっても重要で、インタビューされる相手にとっても重要で、その両方がうまく折り合えと言いますか、お互いの琴線がうまく響きあうといえますか、そういうインタビューができると非常に楽しいし、お互いにとって、なにか新たなものが生まれてくるような気がいたします。

イーミックな視点

大橋 その個人のバックグラウンドがわかっていないと、いいインタビューはできないんですよね。たとえば、私、最初に南米に行った時、コロニアと呼ばれている日本人の農業移住地ですけども、そこに一月、ただ居ました。調査らしいことは何もしませんでした。夕方になったらゲートボールをやっているオジイたちと雑談する。

フィールドワークで大事なことは、文化研究でいうところのイーミック (emic) なアプローチで、このイーミックな視点を大事にしたい。文化研究では、イーミックなアプローチがエティック (etic) なアプローチと対照されます。エティックなアプローチは、心理学でも馴染みのもので、客観的な基準というか、普遍的な基準でいうか、そういうものである文化や社会を見るわけですね。だから、すぐ尺度化できるわけですよ。それに対してイーミックなほうは、その社会の中へ入って行って、十分かどうかわかりませんが、ある程度、長く付き合っ、観察して、そこからその社会

に合った尺度やフレームを引き出してきて、それでその社会を見ようってことなんです。エティック・アプローチでは、たとえていえば「旅人の目」でその社会を見る。それに対してイーミック・アプローチでは、「村人の目」でその社会を見る。そういうふうに対照させることができる。

私は、心理学にとって、今、一番必要なのはイーミックなアプローチだと思うんですよ。できるだけ既成のものを背負っていかない、そのフィールドに入る時は、それが施設だろうが、学校であろうが、村であろうが、私は同じだと思うんですが、今まで身につけたもの、固定観念でいうか、そういうものは自宅か研究室においていてですね。リュック一つで行く。それで、とにかくそこでしばらく過ごしてみるってことなんです。まあ、一月ぐらいはそこに、じーと暮らしたい。酒は飲んでも飲まなくてもいいんですが。そして、そこでは何が面白いんだろうか、テーマになるんだろうか。そうやって問題を見つけ出すということ、それが非常に大事なことだと私は思っています。

今の社会心理学の研究は、エティックな観点にあまりにも偏っていると思います。関西大学におられた野村先生もそれを強調されていました。比較研究をやっても、文化や文脈から切り離してしまって、ただ有意差だけを見るような研究ですね、よくあるのは。その要因なり変数がどういう「意味」を持っているのかがほとんど押さえられていない。ただ有意差がありました、というだけの研究になってしまっている。その変数が個人や社会にとって持っている意味が重要なんですよ。

たとえば、16歳という年齢は、単なる人口学的な年齢区分だけではつまらない。16歳は日本では高校生。それがアンデスへ行けば2児の母親だったりするわけですよね。年齢の持っている意味が、社会や集団によって違っているわけです。それを機械的に何歳から何歳までとカテゴライズしてもほとんど意味がないわけですよね。先日、私に「あなたはまもなく高齢者です。介護保険の対象者となります」という通知が来てギョッとしました。制度上で意味づけられて、それで「ああ、おれも高齢者なんだ」と、だんだんそういう感覚にはなってきますけれども。

村人の視点と旅人の視点

やまだ イーミックな視点とは、「旅人の目より、村人の目」あるいは「現場生活者の目」と言ったらいいのかもしれないですね。あるいは、「その文化固有の視点」、「内在的な視点」と言ったらいいんでしょうか。

それで、少しお聞きしたいのですが、これは「質的心理学の行方」にかかわるのですが、今まで文化人類学などで行ってきたフィールドワークと、心理学のフィールドワークは同じ方法で同じようなものをめざしていくのかということです。

文化人類学では、アフリカなど、かつては辺境の地が多かったわけですが、とりえず現場に入る。そして村の人たちと仲良くなって、そこで生活をして、そして長い年月をかけて観察していくというアプローチですね。それは必ずしもイーミックな視点をめざしたとはいえないかもしれませんが。

心理学も同じように現場に行つて、そこで村人とずっと付き合つて、まあ、お酒も飲み、その人たちの生活を知つて、そこから現場研究をしていくっていうアプローチは、もちろんあると思うんです。でも、もう一つには、旅人でないと見えないものもありますし。また、村人だと思っていたものが、実は本当には村人になっていない、そこには誤魔化しがあつたんじゃないかという反省もあります。村人になり代わつて、村人の言葉で、「村人は、こう思っている」みたいなものを、実は旅人が書いてしまつてたのかもしれない。文化人類学では、その欺瞞性みたいなものも問題になっていると思われまふ。

そうしますとイーミックな視点というものの中身が問われる。そこを、もう少し突っ込んで伺いたいのですが。「村人の視点」と「旅人の視点」は、矛盾する部分があると思うんですが、そのへんの折り合いの仕方はどうでしょうか……。

大橋 私も、エティックなアプローチを否定するんじゃないですよ。エティックなアプローチとイーミックなアプローチをすり合わせることは、もちろん必要だと思うんですよ。そうしなければ、ある種の一般性

ってというか、そういうものは見えてこない。単なる「旅日記」に終わるわけですよね。私が質的研究で取り越し苦勞しているのは、よほどしっかり質的心理学をやつていかないと、「旅日記」が出てくるぞという心配です。単なる個人的な感想とか、そういうものが論文として『質的心理学研究』にいくつも載るようになるのと困るのではないかと私は思うんです。そこが怖いところですね。

イーミックな視点が大事だということは、何も個人的なライフストーリーを、ただ聞けば、それでイーミックになるということでは全然ない。そこが非常に難しいところです。どこかに、普遍性というものを念頭においていないと、それは単なる個別的な事例にすぎない。質的研究といった時に、危険なのは、取り越し苦勞かもしれないが、そういう種類のものが、言葉悪いけど、はびこつた時、どうするんだらうかと。そうすると、「やっぱり」という反動が起こるわけですね。「やっぱり、客観的でないと」という感じで、何となく質的研究がぼしゃつていくようなことが起こらないことを、ひたすら願つているわけです。

やまだ 『質的心理学研究』を学会誌にして、これから先も「良い質的研究」を、まあ、何が良い質的研究かは別として、クオリティの高い研究を奨励し、互いに研鑽していきたいと思つているのは、そういう懸念もあるんですよ。

今までないがしろにされてきた、イーミックな研究、内在的な視点や私や意味というようなものを無視して、「客観」「普遍」というようなものを考えてきたことに対しての反動として、今度はいきなり反対方向へ大きく飛んでしまう危険性があります。

「私」や「意味」を入れようとした時に、今度は、旅日記であつたり、心情風のスケッチであつたり、エッセイや、感想文になってしまう危険があるということですね。質的研究は、「それでも、いいじゃない？」という、何でもありのイージーなものではないはずですよ。「たまたま出会つた一人の人に聞きました。それを私の視点でまとめました。質的研究は一事例でもいいのだし、私の視点が大切なんだから、それでいいでしょうか？」というような種類の安易なものでは、学問とはいえない。

学問としては、フィールドで発見したり、ボトム・

アップで構成したものが、学問のレベルで見て新しい発見になっていなければならない。あるいは学問的論点（イシュー）に切り込む新しい観点を提示してはならない。あるいは、フィールドで、とことん相手とつきあって、新しい現象を発見したり、分厚い記述として蓄積していかなくてはならない。私はよく、初めて夜の空を見上げて「月を見つけた！」という子どもではいけないと学生に言っています。自分にとって初めての体験で新しい発見であれば、その人の人生には意味があるが、それだけでは学問に貢献しない。学問にとって新しい発見かどうか、研究としては問われるわけです。何が新しいかわかるためには、雑誌も本もたくさん読んで、既存の学問の概念や論点を理解し、最新の研究成果を人一倍勉強しなければならない。一人よがりの「旅日記」や「私語り」では、質的研究とはいえないわけですね。

匿名性

大橋 もう一つ、ときどき思うことは、どうして心理学の研究は対象者が匿名なんだろうかということなんです。実名の心理学の研究があってもいいんじゃないかと。対象者、被験者をサブジェクト（subject）と言いますね。でも、サブジェクトの本来の意味は主体ですよ。それに対して客体がオブジェクト（object）。研究対象がサブジェクト、主体であることを、いつのまにか忘れてるんじゃないかな。

自分で確認したことはないんですけども、先生たちに昔教わって驚いたのは、ドイツのヴントの時代の知覚の研究論文には「この実験の被験者は、だれだれ氏である」というふうに最後に個人名が記されているそうです。当時ヴントが実験を始めた頃は、今のように素人は被験者にはなれなかった。ある種トレーニングを受けた特定の人でないと被験者になれなかったんですね。だから被験者の実名が論文の最後に並べられるわけです。

いつから、どうして、サブジェクトが主体から客体、被験者に代わっていったのか、匿名でなければならないようになったのか。これは心理学の研究の根底を突く興味

深い歴史的事実だと思っています。被験者は匿名でなければならないという原則。今はそうなっているわけですね。これは一見、合理的で、プライバシーを保護しているように見えます。けれども、もう一方では、研究を無責任にしているのではないかと思うんですね。研究成果をつまらないものにしてるんじゃないか。実はプライバシーの保護を理由に、個性っていうものが無視されてですね。いつの時代にどこで生きた人間なのかということが問われなくなってしまったんじゃないかと。私は、「実名の心理学」っていうものがあるっていいのではないかと思っています。

やまだ そうですね。とても大事なところだと思います。私も初めて『ことばの前のことば』という本を書いた時に、おなじ問題にぶつかりました。自分の子どもを観察したんですが、名前を事例Aなど、英語の頭文字にする一般的なやり方に違和感があって、どうしても記号にしたいくなかった。自分の子どもをアルファベットや番号で呼びたくないんですね。しかし、本名を出してしまうと本人が後々困ることもあるかもしれないと思って、「ゆう」という通称の名前にした。私が「半具象的」と呼んでいるやり方ですが。それは、たとえ通称で本名ではなくても、人間の名前なのですね。

昔の本では、ピアジェの観察などはちゃんと本名で書かれておりますね。「Jが」「Rが」ではなくて、「ジャクリーヌが」「ローランが」という記述で、それを読む私たちにも、一人ひとりの子どもの姿が思い浮かぶのです。

それから、現在のライフストーリー研究やオーラルヒストリー研究などでは、歴史を生きた証人としてその人の言葉があるわけですから、匿名化するよりはその人の実名を出して、その人の言葉を多くの人に知らせるという方向もあります。それからサブジェクト（subject）という言葉も最近ではできるだけ使わないで、パーティシパント（participant）、「研究協力者」とか「研究参与者」という言葉を使うようになってきています。けれども、研究者と研究協力者が完全に主体として対等になりうるかということでは、また難しい問題もありえるのではないかと思います。

旅日記ではなく、一般性を求めて

やまだ もうひとつですけれども、先生、先ほどです、旅日記じゃなくて普遍性があるとおっしゃいました。質的心理学の行方を考えた時に、どういうふうな普遍化していくのか、一般化していくかという問題に関しては、どうお考えでしょうか。

大橋 最大の難問ですよ。個別から普遍への途という課題ですね。現代の心理学では、被験者、対象者を多くして統計的に処理すれば、それで、どこでも、誰にでも当てはまる一般法則が導かれるという前提がどこかに隠れている。それともう一つ、仮説検証を繰り返していけば、永遠の真実にぶつかるという前提。つまり仮説検証を繰り返していくと、最終的にそれまで人間が気づかなかった真実が見つかるのか？ 逆に言うと、心理的な真実というものが我々の発見を待っているものなのか？

そんなものではないだろうということ、もう最近ではみんな感じているわけです。一般法則といっても、それはその時代の研究者仲間が、相互主観的に構成していく見解、皆で当面納得できる見解にすぎないのであって、何かこう、新しい星を見つけたとか、そういう種類のものとは違う。皆が納得できる観点が共有できることが目標だと思うんですよ。問題にもよりますが、だから、相互主観的に、研究者同士の中で、できれば一般の人も含めて納得のいく構造が見えてくるというのが目標になる。そのことを前提におかないと、個別事例を扱うことと、普遍化や、一般化に至るプロセスのところ、曖昧になってしまうと思うんですね。

私自身は、このプロセスをどういうふうと考えているかという、個別のケーススタディの知見を蓄積する。ケーススタディをしつこいほどやります。けれども、それを直ちに、普遍化、一般化できるとはもちろん思わない。私は、個別と一般化の中間にタイポロジー (typology) を考えるんです。一つの方法として、類型論があるだろうということです。

類型には、フェノタイプ (phenotype) とジェノタイプ (genotype) がある。現象類型と発生類型です。現象類

型のほうは比較的押さえやすいのですが、私自身は、発生類型、つまり現象型の背後にうごめいている、ファクターの絡み合いが知りたいんですよね。現象そのものではなくて、その現象を引き起こしているファクターの絡み合いの類型、ジェノタイプです。研究のプロセスとしては、類型をまず見つけ出したい。そして、それをさらにクロス・カルチュラル (cross cultural) に広げていきたい。そうやって普遍化の方向へ持っていくべきだろうと。個別の事例研究と、一般化の中間に類型論を入れて媒介させていく。一足飛びに一般化に向かうのではなくて。そういう手順だろうと、思っているんです。

やまだ なるほど。旅日記や感想文ではいけない。個別事例はもちろん丁寧に記述するけれど、それからどういうふうにある種の一般化をしていくのか。その時に、今、先生がおっしゃったように、今までの仮説検証的なアプローチと、やっぱり区別しておかなきゃいけないんじゃないかと思うんですね。どこかに真実というモノが転がっていて、それをディスカバー (discover) する、隠されているモノを発見すればいいんだとか、仮説を検証して行けば、いつかは真実にぶつかるのだという前提ではやっていけない。「真実とは何か」「リアリティとは何か」「現実とは何か」「何を我々はめざして研究するのか」という前提を問うことそのものが、質的研究のアプローチが、今までの方法論とは違ってくるんじゃないかということをおっしゃったように思います。

それから、もう一つは、中間にタイポロジーをおきたいということですね。どういう一般化をめざすかは、私は人によって違うんだろうと思います。リアリティは一つではない。真実は一つではないということ、限らない相対化に向かうような誤解を生んでしまうので、丁寧に言わないといけないのですが。見方によっては、異なるもの見え方がありえるだろうということですね。研究の目的、研究が何をめざすかによって見える現象も違ってくるんだと思うんですけど。

私自身は、個別事例から何らかの形で一般化していくこと、モデル化していくことが必要だろうと考えています。そのモデルの一つが、類型というモデルと考えてもよろしいでしょうか。個別事例を単に記述するだけでは、質的研究としては不十分だろうと、考えて

いいでしょうか？

大橋 個別事例の、どこを観察して、どう記述するかは、何を狙っているかによって決まってくるわけですよ、当然。そこには何ほどか一般性へ向けての志向がバックにあって、そのうちの、ある類型を例示するものとしての事例の記述を、私だったらするわけです。だからこそ、膨大なケースのファイルを作る。実際には、ほんの 4、5 行の記述だけでもポンと理解できるケース記述があるわけですよ。しかし、それは全体像がバックにあって、その研究の目的やモデルが示されているからこそ、わずかに数行のケースを読むだけでも、パッと理解できるわけですよ。そういうものだと私は思うんです。つまり全体像というか、モデルっていいのか、そういうフレームがあって初めての個々のケースが活きてくる。そういう感じですね。

やまだ ですから、一次資料のままの記述だからいけないとか、そういうことではなくて、それは何のテーマで何の目的のために記述されているかということを確認するということでしょうね。形式として一事例であるとか、事例だけが並んでいるからいけないということではなくて、何をめざしてそれが記述されているかという、論文のなかでの関係性っていうか、構造を明確に記述する必要があるということですね。

さて時間が早くも過ぎてしまいました。先生何か、最後に一言……

大橋 『質的心理学研究』は今度が 3 号目ですね。普通、3 号雑誌って言って、ここまでは終わってことになるんですね。だけど、少なくともこのジャーナルは、できるだけ続けてほしいというのが何よりの私の願いです。そして、中には旅日記があってもいいけども、周辺分野の人が読んで、隣接領域の人が読んで、読みごたえのある内容のものを載せていただきたい。特に、精神医学や人類学、そういう隣接領域の人と心理学が対話できるようにしないと、心理学が干されてしまわないかと心配です。心理学が仲間内だけの対話で終わるのではなく、隣接領域の人と、とにかく対話できる。そのためには、この質的心理学研究のジャーナルを、何としても今までと同じ姿勢で続けてほしいと思います。学会をつくって忙しくなるだろうと思うんですけども、あまり最初から力を出さないで、息長くこの学会を育ててほしいと心

から願っております。

やまだ 「継続は力なり」と申しますものね。私はせっかちですぐに落胆しやすいので、「持続する志」ということばを呪文のように唱えて、自分で自分を励ますことにしています。どんなに良い志でも、持続しなければ現実を真に変えていく力にはなりにくいし、何か意味ある仕事をするためには、ある程度の時間と忍耐が必要ですね。今までなかったものを最初に創ることも難しいけれど、創始の新鮮で生き生きした勢いを持続することのほうがもっと難しいですね。

はじめから完成品を与えてもらおうと、他者まかせのないものねだりをするのではなく、自分たちが主体的に仲間と共につくっていくこと。質の高いもの、核になるものを大切に丁寧に丁寧に見据えていく眼を養うこと。そして、短期決戦や、一時の流行に終わる消耗品ではなくて、長い軸のなかでそれら大切な核を育てはぐくんでいくこと。そのような息長い試みが、『質的心理学研究』を支えるスピリットになるでしょうか。

それから、先生がおっしゃるように、何よりも読み応えのある論文を載せられる雑誌にしていきたいです。このような対話の場も積極的につくっていきたいですね。それも、できるだけ学際的な対話の場にしていきたいと願っています。

どうも先生、今日は本当にありがとうございました。

(本稿は、2004 年 3 月 20 日にお茶の水女子大学で開催された日本質的心理学学会設立記念集会の対談をまとめたものである。対談企画・まとめ文責 やまだようこ)

(2004.9.27 受稿, 2004.10.23 受理)